

# 第1回平和作文コンクールを開催

浄土宗平和協会では、浄土宗立・宗門高等学校に在籍している生徒を対象にした、第1回平和作文コンクールを開催した。

本事業は、次代を担う高校生の「平和」への想いや考え等々を知り、浄土宗寺院ならびに教師が、若い世代に対し「平和」について働きかけるために今後取り組むべきことを見つけることを目的として、本年度に創案されたもの。

昨年7月に、今回は芝高等学校、東海学園高等学校、東山高等学校、上宮高等学校、鎮西高等学校、真和高等学校、樹徳高等学校、京都文教高等学校の8校を対象に募集、「平和への想い」をテーマにした作文が51作品寄せられた。

応募作品に対し、東山高等学校校長代行・福地信也先生を審査委員長に、正副理事長、事務局長の5名で厳正に審査をした結果、総裁賞1名、副総裁賞2名、理事長賞2名、学校賞1校を決定した。

表彰は、該当生徒が在籍する高等学校において、学校長から荣誉を讃え表彰状を授与していただき、応募者全員に参加賞を配布した。

今号では、全受賞作品を掲載し顕彰すると共に、趣旨の通り高校生の「平和」への想いや考えに触れていただければ幸いである。

## ○応募状況

- ・真和高等学校……………24作品
- ・樹徳高等学校……………20作品
- ・芝高等学校……………6作品
- ・京都文教高等学校…1作品

## ○審査結果

- ・総裁賞（1名）  
真和高等学校1年生・味園結璃さん
- ・副総裁賞（2名）  
京都文教高等学校3年生・山本芽衣さん  
芝高等学校2年生・川野眞雅さん
- ・理事長賞（2名）  
樹徳高等学校3年生・天笠夢莉さん  
真和高等学校2年生・小林 翠さん
- ・学校賞（1校）  
真和高等学校

## 総裁賞

今年で終戦から七十三年を迎えた。平成から令和に時代が大きく変わっていくと共に、戦争を実体験として記憶している世代はほとんど少なくなくなっている。恐らく私達が日本が経験した戦争を実体験として聞くことのできる最後の世代だろう。しかし、戦争を知ることは辛いし、目を背けたくなることも多い。小学校の修学旅行で長崎を訪れた際に語り部さんから当時の様子を聞かせていただいたのだが、その日は一日中気分が上がらずお土産を買う気力も失せてしまった。先ほどまでワイワ

## 平和への連鎖

真和高等学校1年

### 味園結璃

イと賑やかだった同級生も静まり返り多少のトラウマになっていくのだが、この感覚こそが大切だったんだと今になって思うようになった。とりわけ日本にいると戦争を実感を持って意識できる人は殆どいないだろう。大切なものは失って初めて気付くとよく言うが平和がまさしくそれだと思う。毎日同じような、代わり映えない日常を退屈に思える事はとても贅沢で恵まれていることなのだと思う。この恵まれた状況を意識するためにはまずは戦争ときちんと向き合わなければいけない。ちゃんと知って、戦争は絶対にしてはいけない、起きて欲しくないという想いを人からではなく自ら持つことが必要だと思う。

また、家族、そして学校の友達、私に関わってくれる人を大事にしようと思う。私ができることは小さな小さなことだと思う。ただみんなが一番身近な人を大切に思うだけで、平和は実現されていくのではないだろうか。

「平和」というとても壮大なことに思えて何からすれば良いのか途方に暮れてしまふ。けれども、それぞれが身近な人の幸せを願うという素敵な当たり前の連鎖が繋がっていけば平和はすぐそこにあるものだと思うし、私はそう信じている。

第	1	回							
平	和	作	文	コ	ン	ク	ー	ル	

終戦から七十四年経った今日の日本の若者にとって戦争とはあまりにも縁遠いものである。もちろん僕もその中の一人だ。そんな僕が今回応募したのはとある戦争体験者の方のお話を拝聴できた機会があり、多くのことを考えさせられたからである。

お話をしてくださった方が体験されたのは沖縄戦上における疎開生活だ。疎開とは言っても沖縄戦において沖縄本島に安寧な地は無く、すでに戦闘機の音に怯える日々、加えて一人、また一人と亡くなってしまふ家族を見なければならぬという苦痛を感じながら逃げ続けるといふ本当に過酷な生活だったといふ。

話を聞くだけでも心が痛むのに、実際に体験された方の苦悩は安易に想像できるものではないだろう。そう思いながらも自分が戦争のある時代に生まれなくてよかったと安堵したのも事実だった。

もう一つ僕がお話を聞いて感じたことがある。それは僕自身が今生きているということだ。

僕の祖母は当時広島県に住んでいた。当時3歳だった祖母は奇跡的に家族と共に生き残ったけれど、知り合いの中には家族ごと亡くなってしまった人がいたり、皮膚が溶けてしまっている人がいたりしたようだ。今の僕がいるのは祖母の奇跡があったからだとしみじみと感じた。

## 平和への想い

芝高等学校2年

川野眞雅

このように現代の若者の中にも間接的に自分の命と戦争が結びついていて人は多いだろう。だからこそ今の平和に甘えることなく、昔の人々の惜しみない努力と平和を切に願ってきた思いをよく考える必要があると思う。

僕が小学校2年生の時、夏休みに広島にある祖母の家に遊びに行った。ちょうどその頃、広島県にある平和記念公園で近隣の小中学校生が全員参加する追悼式が行われていた。小中学生でもなぜ追悼式をするのかは分かっているのに皆本当に真剣であった。しかしそこには年配の方々とは明らかに異なることがあったのをよく覚えている。それは涙の有無である。実際に戦争を体験した人とそうでない人では追悼に向けての思いの重さが違うのだろう。

僕は追悼式の後、平和記念博物館に連れて行かれた。当時の町並みや原爆投下後の人々の様子が展示されていた。当時の僕にとってそれらは本当に怖かったのだろう。全てを見ずに走って外に出たのを覚えている。今思えば昔の方が戦争に対する恐怖心というものを感じていたのかもしれない。

現在の平和な環境は、そこに身を置く人々に戦争という恐怖を忘れさせてくれるある種の麻薬のように感じる。人々を安心させる反面、中毒性が強いので身の危険に対する耐性が著しく弱まる危険性もある。世の中が平和なのは素晴らしいことだが、人々が危機感を持って、初めて真の平和と言えると思う。

両手を広げて、くるりと回る。私の円の半径は八十一センチ。どうして私は、たった「八十一センチ」を平和に保つことができないのだろうか。

日本という国自体が戦争を放棄していても、私達の日常は戦争だらけだ。自分が得をするために他人を貶め、すぐに差別をしようとする。現に私も、保身のために無関係な人間を傷つけてしまうことが多い。最も恐ろしいのは、私たちがこの現状に慣れてしまっているということだ。自分の周囲の平和すらも、自らの手で壊してしまう。私達が、この先ずっと、他国と争わないという選択を続けることができるのは、到底思えない。少なくとも現在、私達がとっている日々の行動は、平和を望む者の姿勢とは、全くかけ離れたものであるはずだ。

今、隣にいる人の目を見てみて欲しい。できれば手をとって。そして、その人が自分にとってどんな相手であろうと、その人の全てを「許す」ということをして欲しい。競争社会の中で、私達は「許す」という行為にひどく怯えを感じているような気がする。まるで、許し合わないことが社会の厳しさであり、それが正常な状態であると、正当化されているようにも思える。しかし、国同士の争いも、過去の歴史上の誤りや、相手国の正義を許し合えないことが原因であるのだから、これがどんなに勇気のいる行為だったとしても、正当化したまま、放っておくわけにはいかないのだ。

## 真の平和主義者になるために

京都文教高等学校3年

山本芽依

まずは一人、目の前の相手と向き合い、マイナスな思いを昇華させ、憎しみの生まれない関係を築くことを意識すべきだ。漠然と国の平和を祈る前に、私達は日常の戦争を無くしていかなくてはならない。「ごめん」と言われれば素直に許し、罪の意識に苛まれる人間をつくらない。苦しい顔を見つけたら、誰彼構わず手を差し伸べる。そんな人間を許さない人間はそうそういないだろう。人を許すことは、自身が許される人間になることにつながるのだ。

戦争のない国で、私達は日々、孤独に戦っている。時として、私達は言葉の刃で人を傷つけ、厳しい社会のシステムによって人を殺めることもある。絶え間なく流れる不幸なニュースに、私達はもう、驚かなくなった。

本当に、この国の平和維持、さらには世界平和を望むのであれば、第一に手を繋ぐことのできる距離にいる人間と共に、平和な環境を作り出し、それを維持し続ける努力をしなければならぬ。自分の行く先々で常に平和な円を作れるようになれば、平和の予兆は確実に広がっていく。

尊い命の集合体であるこの地球に、もう二度と黒い雨を降らせないために、誰一人涙を流すことのない幸福で満ち溢れた社会の実現へと、私達は進んでいきたい。



理事長賞

第	1	回							
平	和	作	文	コ	ン	ク	ー	ル	

今この時代、我々日本人は平和な世の中を生きていると思う。ここで言う「平和」とは、国が戦争していないという意味である。しかし「戦争していないから」というだけで「平和」だと言い切れる訳ではない。「心の平和」という言葉があるように、衣食住が足りていても、どこか気持ちが穏やかでないことはある。私が考える、今の私たちが目指すべき平和とは、この「心の平和」である。そのために意識すべきことは、「流されない」ことだと思ふ。

「心の平和」には、社会の風潮が関わってくると思う。人々は世の中の雰囲気を感じ取り、明るい社会なら心も自然に穏やかになる。

現代社会の雰囲気特に影響与えると思うのが、インターネットで広まっていく多くの主張や意見である。

例えば事件が起きた時、それらの事件はニュース等を通じて私たちの耳に入り、人々の気分を害してしまう。このとき同時に、インターネット上では、事件に対する悲しみや怒り、思いやりなど様々な声も広まってくる。

このような声は二つの影響を及ぼす。一つ目はある意見の強さを強めること、二つ目はそれによって「考え方の流行」を作り出すということである。

誰かが意見を発すると、徐々にその意見に同調する声も多く出るようになると感じる。その中で共通する考え

## 平和って

樹徳高等学校3年

天笠夢莉

私達の前、日本人の女子高生とケニア出身の女の子が互いに住んでいる人生を交換したらどうなるのかという番組を見た。ケニアにきた日本人女子高生は涙を流して生活し、日本にきたケニアの女の子は満面の笑みを浮かべていた。私はこの番組を見て、自分はなんてわがままな考え方をしていたんだらうと思った。ケニアでは、まだ小さい子どもたちが朝早くに木を集め、勉強もできない生活を送っている。

私達の前、日本人の女子高生とケニア出身の女の子が互いに住んでいる人生を交換したらどうなるのかという番組を見た。ケニアにきた日本人女子高生は涙を流して生活し、日本にきたケニアの女の子は満面の笑みを浮かべていた。私はこの番組を見て、自分はなんてわがままな考え方をしていたんだらうと思った。ケニアでは、まだ小さい子どもたちが朝早くに木を集め、勉強もできない生活を送っている。



理事長賞

第	1	回							
平	和	作	文	コ	ン	ク	ー	ル	

現代社会の雰囲気特に影響与えると思うのが、インターネットで広まっていく多くの主張や意見である。

例えば事件が起きた時、それらの事件はニュース等を通じて私たちの耳に入り、人々の気分を害してしまう。このとき同時に、インターネット上では、事件に対する悲しみや怒り、思いやりなど様々な声も広まってくる。

このような声は二つの影響を及ぼす。一つ目はある意見の強さを強めること、二つ目はそれによって「考え方の流行」を作り出すということである。

誰かが意見を発すると、徐々にその意見に同調する声も多く出るようになると感じる。その中で共通する考え

## 考え方の流行と心の平和

真和高等学校2年

小林 翠

自分が広がっていき、考え方に流行ができるようだ。その中で自分が意見を持つ時気をつけなければならないのが、無意識のうちに大衆に合わせた「意見」、つまり流行に乗っただけの「意見」を言いがちなことだ。心から他の意見に賛成し自分の思考に取り入れたのなら良いが、多数派の強いインパクトを持つ声に流され、自分の意見のように述べることはないだろうか。あたかも自分の意見であるように錯覚しがちだが、それは単なる便乗である。

初めは個々の意見だったものも、数を増し「考え方の流行」となると「社会の風潮」となってフィードバックし人々の気持ちにも影響する。仮にネガティブな考えが流行し社会の雰囲気となったら、それは心の平和から離れていく状況となりうる。また社会が偏った方向に向かったとき、それに気が付く人は少なくなってしまう。

私の祖母は生前、日本が太平洋戦争に突入していったときの世の中のことを、私の母に話していたそうだ。

「世の中がだんだん、少しずつ変わっていくから、誰も気がつかなくなった。」

他人の意見に流されたり便乗したりするのではなく、お互いの意見の違いを正確に認識すること、流行の考え方の是非を冷静に考えること。これが私の考える平和の保ち方、そして「心の平和」を築く方法である。